

● 第四節 総別の三心

『選擇集』および『觀經釈』において、法然は総別の三心を挙げてゐる。両書とも同文で、

此三心者惣（総）而言レ之通（諸）諸行法（別）而言レ之在（在）往生行（今）今拳（通）通撰（別）別意即周（周）矣

（土川本、八〇頁、  
『法全』一二七頁）

とある。この文の解釈について今、石井教道博士の説をそのまま引けば、

三心の一般性について概説すると、この三心は諸の行法に通じる所の一般仏教意識とも云える。然し特殊性についていうと、これは往生行についての宗教意識である。今経には一者至誠心等と説き、一般に通ずる名目を挙げて以て別して浄土意識としての三心を内在せしめられたのである

（『選擇集全講』四四五頁）

と言う。ここで通仏教的な三心を総の三心、特に往生行を行じるときに持たねばならない三心を別の三心として区別しているのである。その意図は、三心が浄土教だけに限つてあるわけではないという浄土教の通仏教的性格と浄土教固有の三心があるという特殊性とを同時に

表現しようとしたことにあるのではなからうか。

善導はこの三心を釈して『観經』の九品くくほんすべてに通じ、さらに定散じょうさん二善に通じるとした。おそらく法然はこれを通仏教的に拡大解釈したものと考えられる。さらに言えば、浄土教の仏教としての正統性を強調すると同時に、その特殊性を念仏行者に理解するように求めたものと言えよう。

### ●第五節 智具・行具の三心

『選擇集』撰述の七年前に東大寺において俊乗房との問答がなされた記録が残されている（『東大寺十問答』・『法全』六四四頁）。その中で決定往生する三心具足の念仏について智具の三心と行具の三心があると述べられている。『選擇集』撰述以前に三心について自己の見解を示したものとして興味深い。

智具の三心というのは、諸宗修学の人が、経論を拠り所としてそれを解釈して念仏の信を取ろうとするものである。すなわち学問的に念仏あるいは三心を解釈しこの価値を見出し往生しようとして得る三心を智具の三心とし、行具の三心と区別しているのである。

行具の三心とは、一向専修いっこうせんじゆ念仏すれば三心も五念四修も自然に具わるといふことで行が先行して具わるのを行具の三心と言う。法然は